

RETAILER ACADEMY NEWS

Mar 2019 | Bentley Motors Japan



次の100年もグランドツーリングをリードする ジュネーブモーターショーでホールマークCEO



ベントレー モーターズは、スイスのジュネーブで3月7日～17日にかけて開催されたジュネーブモーターショーに出展し、100周年記念モデルの発表をはじめ、各新型モデルを発表しました。エイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、ショー開幕前の3月5日に開いたメディア向けのスピーチで、「未来においてもグランドツーリングをリードする存在であり続ける」と話しました。

今年のジュネーブモーターショーのベントレーブースでは、100周年記念特別モデルのコンチネンタルGT ナンバー9エディション by マリナーがデビューしました。さらに、このモデルのインスピレーションの元となった4.5リッター「ブローワー」も展示されたほか、ベンティガSpeedもワールドプレミアとなりました。

ホールマーク会長は、プレスデーのスピーチを「今年はベントレーにとって非常に特別な年です」と切り出し、「今年はもちろんベントレー

モーターズの100年を振り返り、グランドツアラーの分野で残してきた功績を讃えていきます。それと同時に私たちは、このマイルストーンを次の100年に向けた絶え間ないエネルギーと革新的な精神で築いていくプラットフォームとして使っていきます。次の100年においても、私たちはグランドツーリングに革新をもたらし続け、定義し続けていきます」と続けました。

コンチネンタルGT ナンバー9エディションのアンヴェールの後には、この特別なクルマのインスピレーションの元となった、ティム・バー

キンのブローワーの伝説を紹介する動画が放映されました。ホールマークCEOのスピーチ終了後、来場したプレス関係者らは、コンチネンタルGTナンバー9エディションをはじめ、ベンティガSpeed、第3世代のコンチネンタルGTとコンチネンタルGTコンバーチブル、ヨーロッパで初披露となったミュルザンヌW.O.エディション by マリナーを間近に取材するなど、大いに注目を集めた1日となりました。



NEW MODEL



コンチネンタルGT ナンバー 9エディション by マリナー 草創期の名車「ブローワー」の息吹が現代に蘇る

ベントレー モーターズは3月4日、ジュネーブモーターショーで100周年記念特別限定車のコンチネンタルGT ナンバー 9エディション by マリナーを発表しました。このモデルはベントレーのパーソナライゼーションを担うマリナーが手作業で仕上げるもので、世界100台限定で生産されます。

このモデルのモチーフとなったのは、ベントレー草創期にモータースポーツで活躍した名車で、「ブローワー」の異名を持つ4 1/2リッターです。ブローワーはベントレー・ボーイズの1人、ティム・バーキンの愛車としても知られており、ベントレーのレーシングスピリットを象徴する存在です。今回は、そんなブローワーからインスピレーションを得て仕上げられたコンチネンタルGTの特別仕様車について解説します。

EXTERIOR

ブローワーといえばブリティッシュ レーシング グリーンのボディを思い浮かべる人も少なくないでしょう。ナンバー 9エディションのボディカラーは、このカラーを現代風に解釈したビリディアングリーンと、ベルーガの2色から選択可能です(写真はビリディアングリーン)。

また、ブラックラインスペックとカーボンボディキットを標準装備し、ボディ同色の22インチアロイホイールが装着されます。さらに、左右のフェンダーには「9」をモチーフにしたバッジが装着されるほか、センテナリースペックによって各所がセンテナリーゴールドで加飾されます。もちろんウイングド' B' バッジとステッププレートには、ベントレーの歴史を示す「1919-2019」の文字が入ります。



INTERIOR

レザーカラーは、いずれも歴史を感じさせるカンブリアングリーンとベルーガから選択できます。グランドブラックのウッドパネルは、フェイスパネルからウェストレールまでキャビン囲むように配されます。センターコンソールのパネルにはエンジンスピンを採用し、ブローワーの運転席の雰囲気を再現しました。インテリアにおけるベントレーを象徴するモチーフの1つであるオルガンストップコントロールは、クロームの替わりに特別な限定車らしく18金で仕上げました。ヘッドレストとドアパネルには、エンボス加工の「B」マークが入ります。

そして、インテリア最大の特徴が、ローテーションディスプレイです。3連メーター中央のダイヤルは、「9」を模したデザインで、中にはブローワーで実際に使われていたシートのウッドインサートがディスプレイされています。



ブローワーとティム・バーキン

多くのベントレー愛好家にとって、4 1/2リッター “ブローワー” は、戦前のレースにおけるベントレーの象徴であり、そのドライバーであるベントレー・ボーイズのティム・バーキンのイメージとともに語り継がれています。こういった好印象とは対象的に、4 1/2リッターは、クリックルウッド時代のベントレーの中で、最も勝利と縁遠いモデルでした。創業者W.O.ベントレーも、その開発にひどく反対したと伝えられています。

しかし、レースでのブローワーはまるでロケットのような速さを見せ、ベントレーファンを虜にしていきました。1930年のル・マンでは、ブローワーを駆るバーキンと、メルセデスのルドルフ・カラツィオラとのデッドヒートは語り草となっています。

ブローワーは累計で55台が製造されました。その希少性やバーキンのエピソードなどが相まって、現在では100万ポンドの価値が付く車両もあるようです。



EV時代を見据えたニューモデルも多数登場 ジュネーブ・モーターショー 2019

去る3月7日から17日にかけて、第89回ジュネーブ・モーターショーが開催されました。今回は多くのメーカーが市販予定のEVやプラグインハイブリッドモデルを発表。プレミアムブランドにおいても電動化の流れが加速しています。また、新興メーカーのハイパーカーでは、フルEVで1000馬力以上のスペックを標榜するモデルがいくつもあり、電動化による高性能化が主流になりつつあります。

Ferrari F8 Tributo

フェラーリ F8 トリブート



フェラーリ 488 GTBの後継となる最新のV8ミッドシップスポーツカーがF8 トリブート。搭載されるエンジンは、2016年から3年連続でインターナショナル・エンジン・オブ・ザ・イヤーに輝いた3.9L V8ツインターボエンジンの改良版で、最高出力720 ps、最大トルク770 Nmを発揮します。このスペックは488 ピスタと同じで、488 GTBからは50psの向上となります。モデル名は、フェラーリ史上最強のV8エンジンに対するオマージュを込めたもの。裏を返せば、V8エンジンはこのモデルが最後で、次はV6ハイブリッドのパワーユニットになる可能性が高いといえます。

■ フェラーリ F8 トリブートの ○とX

- フェラーリ 488 GTBの後継モデルとして、フェラーリ史上最強のV8ターボエンジンを搭載。スポーツカーのハイブリッド化に抵抗のあるユーザーにとっては狙い目
- ✕ 世代としては、2009年に登場した458 イタリアの流れを汲む改良モデル。フルモデルチェンジではないため、新世代モデルを待つかどうか判断が分かれるところ

Audi A8 TFSI e

アウディ A8 TFSI e



電動化を強力に推し進めているアウディは、今回、展示車両をEVとプラグインハイブリッド車に統一。発表されたニューモデルは、同社が「e-tron」と呼ぶEVの市販予定モデル3種類とフォーミュラEのマシン、それに2019年中に導入を予定している4種類のプラグインハイブリッドモデルでした。フラッグシップのA8に設定されるA8 TFSI eは、ガソリンエンジンに電気モーターを組み合わせたもので、EVモードでは40kmの走行が可能。会場には全長5.3mのロングホイールベースモデル、A8 L 60 TFSI e quattroが展示されていました。

■ アウディ A8 TFSI eの ○とX

- より強力になった電気モーターと大容量のリチウムイオンバッテリーで実用性が向上。EVモードが標準のため、早朝に閑静な住宅街を走る機会が多いユーザーにはメリット大
- ✕ 欧州ではアウディが自ら充電サービスを用意し、欧州16カ国で多くの公共充電スタンドが利用できるようになっている。日本でも使い勝手を高める専用サービスを検討してほしい

Bugatti La Voiture Noire

ブガッティ ラ・ボワチュール・ノワール



2019年で創立110周年を迎えたブガッティは、それを記念して2種類の限定モデルを発表しました。写真の「ラ・ボワチュール・ノワール」は、往年の名車、ブガッティ 57 SC アトランティックのオマージュとなるワンオフモデル。ベースは同社の「シロン」で、価格は新車としては史上最高額となる1100万ユーロ(約14億円)と発表されました。もうひとつが、「シロン・スポーツ」をベースにした「シロン・スポーツ110ans ブガッティ」で、母国フランスへの敬意を表現した20台の限定モデル。どちらも発表時点で完売となっています。

■ ブガッティ ラ・ボワチュール・ノワールの○とX

- 1人の顧客のためにワンオフモデルを製作する究極のビスポーク。ブガッティのようなブランド力があれば、14億円の自動車でも販売可能なことを証明した意義は大きい
- ✕ ワンオフモデルが製作可能であることを示したことで、金に糸目をつけない顧客から同様のオーダーが寄せられる可能性が高い。優良顧客の場合はその対応が難しい

McLaren 600LT Spider MSO

マクラーレン 600LT スパイダー MSO



マクラーレン・オートモーティブは、ハイパーカーの「スピードテール」、同社のビスポーク部門であるMSO(マクラーレン・スペシャル・オペレーションズ)が手がけたマクラーレン 600LT スパイダーと720S スパイダーなどの展示を行いました。いずれのモデルも今回がワールドプレミアでしたが、もう一台、注目すべきニューモデルが発表されています。それは「The new rules of Grand Touring」のスローガンとともにカモフラージュされた、テスト車両の走行シーンのみ公開されたグランドツアラー。すでにデザイナーサイトが開設されています。

■ マクラーレンのグランドツアラーとは？

- 同社にとって4番目のシリーズとなるこのニューモデル。他社のGTモデルよりも軽量で、ほかのマクラーレンと同様の敏捷性を備えた、ミッドシップレイアウトのグランドツアリングカーとなる模様。今後数カ月以内に発表される予定



Lamborghini Huracán EVO Spyder

ランボルギーニ ウラカン EVO スパイダー



ランボルギーニは2つのニューモデルを発表しました。ひとつは写真のウラカン EVO スパイダーで、先に発表されたウラカン EVOのオープン版。5.2L V10自然吸気エンジンは、ウラカン ペルフォルマンテスパイダーと同じ最高出力640ps、最大トルク600Nmを発揮。動力性能も同一で、価格は32,827,602円(税抜)。もうひとつのアヴェンタドール SVJ ロードスターは、クーペのアヴェンタドール SVJと同じ、最高出力770ps、最大トルク720Nmを発揮する6.5L V12自然吸気エンジンを搭載したオープンモデル。価格は57,143,135円(税抜)と発表されました。

■ ランボルギーニ ウラカン EVO スパイダーの ○とX

- 今や絶滅危惧種となった大排気量のマルチシリンダー自然吸気エンジンを搭載。V10エンジンの独特の咆哮を楽しみたいユーザーには今回がラストチャンスかもしれない
- ✕ エンジンスペックと動力性能はウラカン ペルフォルマンテ スパイダーから変更なし。ただ、EVOのほうが快適性が高く、車重も重いため、実質的な性能は向上している

Porsche 911 Cabriolet

ポルシェ 911 カブリオレ



ポルシェは今回、すでに写真が公開されていた新型ポルシェ 911 カブリオレを初披露。さらにボクスターとケイマンに追加されたスポーツモデルの718 T、そして新型マカン Sをデビューさせました。いずれも既存ラインアップへの追加モデルのため、比較的地味な展示内容でした。むしろ注目されたのは、同社初のフル電動スポーツカーとなる「タイカン」の購入希望リストに、全世界で20,000人以上が登録したというニュース。0-100km/h加速3.5秒以下、一度のフル充電で500km以上の走行が可能となる予定のタイカンは、今年9月に発表されます。

■ ポルシェ 911 カブリオレの○とX

- 新開発の軽量なルーフモーターを採用したことで、オープンの所要時間を約12秒に短縮。電動ウィンドディフレクターも2秒で展開し、オープン走行時の快適性が向上
- ✕ ソフトトップ収納部が大きく盛り上がっているため、後方視界に難あり。また、現時点では後輪駆動のカレラSと4輪駆動のカレラ4Sのみで、カレラおよびカレラ4は未発表

COMPETITOR INFORMATION

Mercedes-AMG GT R Roadster

メルセデスAMG GT R ロードスター



メルセデスAMGは、昨年は独自開発した初の4ドアモデルとしてMercedes-AMG GT 4ドアクーペを発表するなど、モデルラインアップを強化しています。今回はシリーズ最高峰となるメルセデスAMG GT Rのロードスター版を発表したほか、新型GLEのAMGモデル、そして現行Sクラスで最後といわれるV12エンジンを搭載したS 65 ファイナルエディションを発表しました。なかでも585psを発揮するAMG GT R ロードスターは、0-100km/h加速3.6秒、最高速度317km/hを誇る、究極のオープン2シータースポーツカーとなります。

■ メルセデスAMG GT R ロードスターの〇と×

- シリーズ最強モデルのスペックはそのままに、オープン2シーター化した究極の全部入りモデル。全世界750台の限定モデルのため、日本上陸は数台か？
- × メルセデスAMG GT ロードスターには、すでにGT、GT S、GT Cの3種類が用意されているため、GT Rが追加されると、それぞれの存在がニッチになりすぎる可能性がある。

Mercedes-AMG GLE 53 4MATIC+

メルセデスAMG GLE 53 4MATIC+



昨年フルモデルチェンジされた新型のメルセデス・ベンツ GLEに、ハイパフォーマンスモデルのメルセデスAMG GLE 53 4MATIC+が加わりました。パワーユニットは、3L 直6ツインターボエンジンに、マイルドハイブリッドと呼べる「EQ ブーストスタータージェネレーター」を組み合わせたもの。この電動補助コンプレッサーは一時的に16kWのパワーと250Nmのトルクを提供することが可能で、48V電気システムへの給電も行います。外観ではスポーティなデザインとAMG専用グリル、20インチ軽合金ホイールなどにより差別化を図っています。

■ メルセデスAMG GLE 53 4MATIC+の〇と×

- ハイブリッド化により、最高出力435ps、最大トルク520Nmを発揮。AMG専用のエアサスと9速AT、4輪駆動システム、ドライビングモードによる走行性能の高さも魅力
- × 新型Aクラスと同じ次世代インフォテインメントシステムのMBUXを装備。音声認識機能などの先進性は申し分ないが、機能を使いこなせないユーザーが増える可能性がある

BMW 7 Series

BMW 7シリーズ



BMWは、フェイスリフトしたBMW 7シリーズをはじめ、本物の隕石を内外装に用いたワンオフモデルのBMW M850i ナイトスカイ、そして最新のプラグインハイブリッドモデルを発表しました。なかでも新型のBMW 7シリーズは、ラグジュアリー SUVのX7と同じ新世代デザインを採用し、非常に押し出しの強いフロントマスクとなりました。インテリアではデジタルコックピットや進化した音声コントロールシステムを採用。モデルラインアップには3種類のプラグインハイブリッドを設定するなど、当初から充実したラインアップを用意しています。

■ BMW 7シリーズの〇と×

- 新世代デザインの採用でダイナミックな印象を高めたエクステリア。プラグインハイブリッドはゼロエミッションによる走行距離が30%増加し、50～58kmを走行できる
- × キドニーグリルの面積が前モデルに比べて40%も拡大されたため、見慣れるまでは奇異に映る。さりげない高級感を好むユーザーが新しい顔を受け入れるかどうか注目

アストンマーティンが発表した注目のニューモデル

今回のショーに出展したプレミアムブランドのなかで、もっとも勢いを感じさせたメーカーがアストンマーティンです。開発中の2台のハイパーカーに加え、ミッドシップレイアウトの2台のコンセプトモデル、そしてフルEVのオールテレインコンセプトモデルも展示。積極的なニューモデル攻勢に圧倒されました。



Aston Martin Valkyrie

アストンマーティン・ヴァルキリー



以前からレッドブル・レーシング・アドバンスド・テクノロジーズとの共同開発を進めてきたハイパーカーの「ヴァルキリー」は、最初のプロトタイプがブースに展示されました。今回新たに発表されたパワーユニットは、排気量6.5LのV12自然吸気エンジンにハイブリッドシステムを組み合わせたもの。最高出力は1160ps、最大トルクは900Nmと発表されました。

Aston Martin AM-RB 003

アストンマーティン AM-RB 003



2018年9月に製作を発表した新たなハイパーカー「プロジェクト003」のコンセプトモデルが「AM-RB 003」の名で初公開されました。第1弾の「ヴァルキリー」、第2弾のサーキット専用モデル「ヴァルキリーAMR Pro」に次ぐ第3のハイパーカーとなる「AM-RB 003」は、前者のようなモータースポーツ直系モデルではなく、実用性と快適性を加味した内容。ヴァルキリーと多くの技術的特徴を共有しながら、エアロダイナミクスに航空宇宙技術を採用するなど、非常に革新的な内容となっています。また、V6ターボエンジンに電気モーターを組み合わせた、自社開発のハイブリッドシステムが搭載される予定です。

Lagonda All-Terrain Concept

ラゴンダ・オールテレイン コンセプト



2018年のジュネーブ・モーターショーで、同社は「ラゴンダ」の名前をEVのラグジュアリーカーブランドとすることを発表し、「ラゴンダ・ヴィジョンコンセプト」を展示しました。今回のショーでは新たにクロスオーバー SUVの要素を備えた「ラゴンダ・オールテレイン コンセプト」を発表。英国ウェールズ州セント・アサンに建設した新工場において2022年に生産を開始する予定です。

Aston Martin Vanquish Vision Concept

アストンマーティン・ヴァンキッシュ ヴィジョン コンセプト



限定生産のハイパーカーではなく、数年後に登場する量産ミッドシップスポーツカーのコンセプトモデルが「ヴァンキッシュ ヴィジョン コンセプト」。このモデルは本社にとって4番目のミッドシップモデルとなり、シャシーはヴァルキリーやAM-RB 003のカーボンファイバーではなく、量産を意識した接着アルミニウム構造を採用。パワーユニットには自社開発のV6ターボエンジンが予定されています。フェラーリ、ランボルギーニ、マクラーレンなどのライバルと直接競合することになるこのミッドシップスポーツカーは、2022年の生産開始を予定しています。

ブライトリング for ベントレー プレミエシリーズに100周年記念モデルが登場

ベントレーとパートナーシップを結ぶスイスの高級腕時計ブランド・ブライトリングから、ベントレーの100周年を記念したプレミエ B01 クロノグラフ42 ベントレー センテナリー リミテッドエディションが発表されました。

ブラックのサブダイヤルを配したダイヤルは、ベントレーのウッドパネルを連想させる木製。ムーブメントはブライトリングの独自開発製造のキャリバー 01で、ウイングド‘B’ロゴ入りのシースルーケースバックから、その精巧な造りを見ることができます。18Kレッドゴールド製モデルには「ONE OF 200」、ステンレス製モデルには「ONE OF 1000」の文字がそれぞれ刻まれており、このスペシャルエディションの製造数を確認できます。18Kレッドゴールドモデルには、ブラウンレザーストラップを採用。ベントレーのダイヤモンドキルティングをモチーフとしたパターンと、ベントレーと同様の美しいステッチが施されます。ステンレスモデ

ルでは、同じブラウンレザーストラップか、ステンレス製ブレスレットを選ぶことができます。

ベントレー モーターズのエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「このたび発表されたブライトリングの100周年記念モデルは、長年にわたり世界的に成功を収めてきたパートナーシップと、将来に向けてどのように取り組んでいくかを示すものになりました」などとコメント。ブライトリングのジョルジュ・カーンCEOも、「ベントレーとのパートナーシップは私たちの誇りです。100周年記念モデルは、ベントレーの歴史、ラグジュアリーさ、輝かしいレースの系譜、そしてブライトリングとの緊密なつながりを祝福するものです」などと語っています。



プレミエ・ベントレー・センテナリー・ リミテッド・エディションの価格（消費税別）

- ステンレススチール製ケース、
ステンレススチール製ブレスレット付き
¥1,180,000
- ステンレススチール製ケース、
ベントレー・インスパイアド・レザー・
ストラップ&フォールディング・バックル付き
¥1,095,000
- ステンレススチール製ケース、
ベントレー・インスパイアド・レザー・
ストラップ&ピン・バックル付き
¥1,075,000
- 18Kレッド・ゴールド製ケース、
ベントレー・インスパイアド・レザー・ストラップ&18Kレッド・
ゴールド製ピン・バックル付き
¥3,250,000

COLLECTION

100周年記念の新アイテム マグおよびエスプレッソセットが追加

先月号でもご紹介した100周年記念アイテムで「準備中」となっていたアイテムの準備が整いました。

センテナリー マグは、ブラックとゴールドのディテールが施された磁器製のマグカップです。100周年記念ロゴの「100 Extraordinary Years」と、ベントレー本社のある「Crewe」のランドマークバッジで飾られています。希望小売価格は¥3,300です。

センテナリー エスプレッソ セットは、2組のエスプレッソカップとソーサーをセットにしたものです。カップとソーサーの縁は、100周年記念のゴールドで縁取られています。これは、2019年に製造されるすべてのベントレーに施されるセンテナリースペックで使用されるセンテナリーゴールドからインスピレーションを得たモチーフ。カップにはベントレーのエンブレムが、ソーサーには「100 Extraordinary Years」のロゴが入ります。希望小売価格は¥8,000です。



ACADEMY

新型コンチネンタル GT コンバーチブルの Eラーニング

新型コンチネンタル GT コンバーチブルのプロダクトトレーニングのEラーニングコースの準備が整いました。今月末の完了を目安に、全セールススタッフ、アフターセールススタッフへの受講をご指導ください。Bentley Hubより以下の手順で新型コンチネンタル GTのモジュールに進むことができます。



(1) 「ACADEMY」→「EACADEMY」を選択

(2) 「マイラーニング」→「カタログ閲覧」を選択

(3) 「Product」→「Continental」を選択

(4) 「CONTINENTAL GT CONVERTIBLE」をクリック→受講開始

完了したかどうかを確認するには、「マイラーニング」の「マイトレーニング履歴」でご確認いただけます。受講忘れなどないように、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



ジュネーブ・モーターショー2019から 読み解く電動化の未来

2019年3月5日に開幕したジュネーブ・モーターショー。数多くのワールドプレミアが登場し、例年以上の盛り上がりを見せていました。そんな中、欧州ブランドは非常に多くの電動化モデルを出品し、欧州の電動化への強い意欲を見せました。今回は、そんな電動化モデルがいつぐらいから市販されるのかと合わせて紹介します。

アストンマーティン・ラゴнда [2022y ~]



EVに特化したラグジュアリーブランドとして復活

昨年、アストンマーティンは第二次世界大戦前に隆盛を誇った「ラゴнда」をEVに特化したブランドとして復活させると発表しました。そして今回のジュネーブではSUVの「オールトレイン・コンセプト」を発表し、2022年からの生産をアナウンスしました。

メルセデス・ベンツ [2019y ~]



EQブランドのミニバンが登場

メルセデス・ベンツの電動化ブランドであるEQ。すでに世界各地で2019年からの市販が予定されています。そのミニバンモデルにあたる「EQV」が登場。通常の「Vクラス」同様の6人乗りや3列シートなどが予想されます。100kWhの電池を搭載し、航続距離は約400kmです。

フォルクスワーゲン



デューンバギーがEVでカムバック

フォルクスワーゲンの市販化目前の電動化ブランド「ID.」のプラットフォームを使った「ID. バギー」が登場。1960年代に人気を集めたモデルの復活です。電動化ソリューションが揃っているため、市販化も夢ではありません。

アウディ [2020y ~]



アウディ5番目のEVとなる「Q4 e-tron concept」

アウディが発表したのは全長4.59mのコンパクトな電動SUVの「Q4 e-tron concept」でした。アウディは、このモデルを2020年末にアウディ・ブランドの5番目の電気自動車として発売すると説明しました。

ホンダ [2019y ~]



欧州で発売目前のコンパクトEV

ホンダは2025年までに欧州で発売する4輪車すべてをEVとハイブリッド、すなわち電動化すると発表しました。その先兵がコンパクトなEV「HONDA e」です。2019年後半に生産が開始されます。

プジョー [2019y ~]



最重要モデル「208」にEVを用意

プジョーは今回、最重要モデルである「208」の新世代モデルを発表。あわせて、このモデルにはEV版が存在することも明らかになりました。さらに新型「508」にプラグインハイブリッドを追加しています。

フィアット



次世代のパンダを予感させるコンセプト

フィアットはコンパクトなEVである「コンセプト・チェントヴェンティ」を発表。名称は「120」を意味し、フィアット・ブランド120周年を記念します。欧州で人気の「パンダ」の後継との噂もあります。

アルファロメオ



ブランド初のプラグインハイブリッドSUV

アルファロメオは、ブランド初のプラグインハイブリッドとなるSUVコンセプト「トナーレ」を発表。「ステルヴィオ」よりもコンパクトであり、燃費ではなく走りの良さを売りにするモデルとされています。

足踏み状態の自動運転技術

未来の技術として、大きな期待を寄せられているのが自動運転です。近年、自動車メーカーをはじめサプライヤー、大学などの研究機関が熱心に開発を進めたことで、自動運転に関する技術は、大きな進化を遂げています。ところが現在、自動運転技術は足踏み状態に陥っています。問題はジュネーブ条約とウィーン条約です。それらの国際条約には「クルマにはドライバーが乗る」という決まりがあります。それが改正されないことには、ドライバーなしの自動運転が実現できないのです。もちろん条約改正の話は行われており、近く、条約は改正される見通し。自動運転車が街を走るのは、その改正の後になるでしょう。

